

ウィリアム・ウィルソン

WILLIAM WILSON

エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe

青空文庫

それをなんと言うのだ？ わが道に立つかの妖怪、
恐ろしき良心とは？

チエインバリン（1） 「フェアロニダ」

さしあたり、私は自分をウイリアム・ウィルスンという名にしておくことにしよう。わざわざ本名をしるして、いま自分の前にあるきれいなページをよごすほどのことはない。その私の名前は、すでにあまりにわが家門の侮蔑ぶべつの——恐怖の——嫌悪けんおの対象でありすぎている。怒った風は、その類たぐいなき汚名を、地球のはてまでも吹き伝えているではないか？ おお、恥しらずな無頼漢ならすもののなかの無頼漢！——現世にたいしてお前はもう永久に死んでいるのではないか？ その名誉にたいして、その栄華にたいして、その燦然さんぜんたる大望にたいして？——そして、濃い、暗澹あんたんとした果てしのない雲が、とこしえにお前の希望と天国とのあいだにかかっているのではないか？

私はいまここで、たといそれができたにしても、自分の近年のなんとも言いようのない不幸と、許しがたい罪悪との記録を書きしるそうとはしまい。この時期——この近年——に背徳行為が急にひどくなつたのであつて、そのそもそのきつかけだけを語るのが、私のさしあつての目的なのである。人間というものは普通は一步一步と墮落してゆくものだ。ところが、私の場合では、あらゆる徳が一時にマントのようにそっくり落ちてしまった。わりあい小さな悪事から、私は大またぎにエラガバルス（2）だつてやれないよう

な大悪無道へ跳びこんだ。どうしたためぐり合せで——どんな一つの出来事からこんな悪いことになったのか、私が語るあいだ、しばらく耳を貸していただきたい。死は近づく。それを前ぶれる影は、私の心をやわらげる。ほの暗い谷（3）を歩みながら、私は世の人々の同情を——むしろ憐れみ^{あわ}をと言いたいののであるが——切望している。自分がいくらかは人間の力ではどうにもできない境遇の奴隷^{どれい}であつたということを、私は世の人々に信じてもらいたいのだ。これから語ろうとする詳しい話のなかで、私のために、広漠^{こうばく}とした罪過の砂漠のなかにいくつかの小さな宿命のオアシスを、捜し出してもらいたいのだ。以前にもこれほど大きな誘惑物は存在したではあろう。が、しかし、少なくともこんなふう^{ふう}に人間が誘惑されたことは前には決してなかつた——たしかに、こんなふう^{ふう}に落ちこんだことは決してなかつた——ということ^{こと}を認めてもらいたいのだ。——これは誰でも認めずにはいられないことであるが。とすると、こんなふう^{ふう}に苦しんだ人間はいままで一人もなかつたのであろうか？ 実際、自分は夢のなかに生きてきたのではなからうか？ そして自分はいま、この世のあらゆる幻影のなかでももつとも怪奇なもの、恐怖と神秘との犠牲として死んでゆくのではなからうか？

私は、想像力に富んで、しかもたやすく興奮する気質のために昔からずっと有名だった

一族の子孫である。そして、まだごく幼いころから、この家族の性格を十分にうけついでいる証拠をあらわしていた。成長するにしたがつて、その性格はいっそう強く発達し、いろいろな理由で、友人たちにはたいへん心配をかけたし、また自分自身には非常な損害をかける原因となつた。私は我儘わがままになり、もつとも放縦な気まぐれにふけり、まったく手におえない激情の虜とりことなつてしまった。両親は、気が弱く、私自身と同じような生れつきの虚弱に悩まされていたので、私の特徴となつたその悪い性癖をとめることはとてもできなかつた。幾たびかの弱い、方針を誤つた努力は、親たちのほうの完全な失敗に、そしてむろん私のほうの完全な勝利に、終つたのだ。そのときから私の言葉は一家の法律となつた。そして、普通の子供ならまだ手引紐てびきひも（4）さえ放せないような年ごろから、私は自分の思うままにさせられ、名だけは別として、自分の行為の主人公となつたのであつた。

学校生活についての私のいちばん古い思い出は、霧のかかったようなあるイングラントの村にある、大きな、不格好な、エリザベス時代風の建物につながっている。その村には節瘤ふしこぶだらけの大木がたくさんあつて、どの家もみなひどく古風だつた。実際、その森厳な古い町は、夢のような、心を鎮めてくれる場所であつた。いまでも、私は、空想でその樹陰ふかい並木路なみきみちのさわやかな冷たさを感じ、その無数の灌木かんぼくのかぐわしい芳香

を吸いこみ、組子細工のゴシック風の尖塔せんとうがそのなかに包まれて眠っているほの暗い大気の静寂をやぶつて、一時間ごとにふいに陰鬱いんうつな音をたてて響きわたる教会の鐘ベルの深い鈍い音色に、なんとも言えない喜びをもって新たにうち震えるのである。

この学校と、それに関したこととの、こまかな思い出にふけることがおそらく、いま自分のどうやら経験できるいちばん多くの快楽を私に与えてくれるのだ。私は不幸のなかにひたされてはいるのだが——ああ！ただあまりに真実すぎる不幸——二、三のとりとめのない事がらを述べたてて、ほんの少しの一次的なものであるうとも、慰めを求めることは、許してもらえらるだろう。そのうえ、これらの事がらは、まったく小さな、またそれだけとしてはばかばかしいものではあるが、のちに自分にすっかり蔽おほいかぶさった運命の最初のおぼろげな警告を自分が認めた時と所とに関係のあるものとして、私の空想には偶然的な重大さを持つているものなのだ。だから、回想させてもらいたい。

その家は、前に言ったように、古くて不規則なものであった。構内は広くて、てっぺんにはガラスのかけらを漆喰しつくいに植えつけた、高い、丈夫な煉瓦れんが塀べいが、その周囲をぐるりと取りまいていた。この牢獄ろうじやくのような墨壁が私たちの領土の限界になっていたのだった。その外は、一週に三度しか見られなかった。——一度は毎土曜日の午後には、二人の助教師

に連れられて、一団となつてどこか付近の野原をしばらく散歩することを許されるときで、——あとの二度は日曜日に、村に一つある教会の朝と夕との礼拝式へ、いつも同じ決つたとおりに列を組んで行くときであつた。その教会は、私たちの学校の校長が牧師なのであつた。この校長が厳かな、ゆつくりした足どりで説教壇へ上がつてゆくのを、私はいつも廻廊かいろうにある遠く離れた私たちの座席から、どんなに深い驚きといぶかしさで眺めたことであらう！ あんなにしかつめらしく温和な顔をして、あんなにつやつやした、あんなに僧侶そうりよらしくひらひらした衣服を着て、あんなに念入りに髪粉をつけた、あんなにいかめしい、あんなに大きな仮髪かつらをつけたこの尊い人が、——この人が、ついさつきまで、苦虫をかみつぶしたような顔つきで、嗅煙草かぎたばこでよごれた着物を着て、木篋きべら（5）を手にしながら学校の峻しゅんげん 厳げんな法則を執行していた人なのであらうか？ おお、あまりに奇怪でどうしてもわからない大きな不思議！

その重々しい扉の一つの角に、もつと重々しい一つの門が厳然として立っていた。それは鉄の螺釘ねじくぎを方々に打ちつけて、上にはぎざぎざの鉄の忍しのびがえ返しを打つてあつた。なんと深い畏怖いふの感じを、それは起させたことであらう！

その門は、さきに述べたあの三回の定期の出入りのときのほかには、決して開かれるこ

とがなかった。そして開かれるときには、その巨大な蝶ちようつがい番がぎいつと軋きしるたびごとに、私たちはその音のなかに、かずかずの神秘を——厳かな注意や、あるいはもつと厳かな瞑め想いそをそそる多くの事がらを——見出みいだしたのであった。

広い構内は形が不規則で、大きなひっこんだ所がたくさんあった。そのなかのいちばん大きな三つ四つのが運動場になっていた。そこは平らかで、細かい堅い砂利を敷いてあった。そこには樹きもなければ、腰掛ベンチもなく、それに類したものがなにもなかったことを、私はよく覚えている。むろんその運動場は家の背後うしろにあったのだ。前面には、黄楊つげやその他の灌木類を植えた小さな花壇があった。しかし、この神聖な区画は、私たちは実際ほんのたまにしか通つたことがなかった。——たとえば、初めて学校へ上がったときとか、最後にそこを去るときとか、あるいはたぶん、親か知人かが迎えにきて、クリスマスや夏休みにいそいそと家へ帰るときとかだった。

だが、その校舎たるや！——なんとという奇妙な古い建物だったろう！——しかも、私にとつてはまったくなんという魔法の宮殿であつたらう！ その曲りくねりには——そのとても理解できない細かな区分は、ほんとうに果てしもなかった。いつであらうと、いま自分のいるところは、一階か二階かということ、確信をもって言うことはむずかしかつ

た。どの室へやからでも別の室へ行くには、きつと三段か四段のぼるか降りるかしなければならなかった。それから、脇わきへそれる道は無数にあつて、——ほんとうに想像もできぬほど、——実に何遍も何遍ももとへ戻つて来るものだから、この屋敷全体に関する私たちのいちばん正確な観念も、私たちが無限ということについて考える観念と、さほど大して違わないくらいだった。ここに住んでいた五十年のあいだ、私は、自分自身と他の十八人か二十人ばかりの生徒とに割当てられた小さな寝室がどんな遠く隔たつた場所にあつたのか、はつきりと確かめることがどうしてもできなかつた。

教場は建物のなかで——いつそ、世界じゆうで、と私は言いたい——いちばん大きかつた。それは非常に長くて、狭く、陰気なくらい低く、上の尖とがつたゴシック風の窓がついて、天井は樫かしであつた。室の端つこの、なんとなく怖いような気のする一つの角に、八フィートか十フィートくらいの四角い囲いがあつて、そのなかには、私たちの校長である尊師ブランスビー博士の「祈祷時間中」の聖サンクタム室があつた。それは堅けん牢ろうな造りで、がつしりした扉とびらがついていて、「先生ドミイネ」の留守中にその扉をあけようものなら、私たちはまったくいっそあの *peine forte et dure* (強い厳しい刑罰 (6)) で死んだほうがましだと思ふくらい目の目にあうのだつた。他の角にも似たような仕切りが二つあり、實際、前のよ

りはずつと尊敬されてはいなかったが、それでもやはり非常に畏怖の念を起させるものだった。一つは「古典」の助教師の講壇で、もう一つは「英語および数学」の助教師であった。室内のあちこちに、際限のない不規則さでごちゃごちゃに入り交つて、無数の腰掛けと机があつた。どれも黒くて、古風で、古ぼけていて、ひどく指垢ゆびあかのついた書物がめちやくちやに積み重ねてあり、名前の頭文字や、略さないで書いた姓名や、怪異な形の絵や、その他さまざまナイフな小刀で彫りつけたものなどの、創痕きずあとをつけられているので、かつては多少かたちを残していた原形の少しさえすつかり失くななつてしまつている。水を入れた大きな桶おけが室の一方の端に立つていたし、もう一方の端には途方もない大きさの柱時計が立つていた。

この古びた学校のがつしりした壁に取りまかれて、私は、それでも退屈もせずいや厭にもならず、自分の生涯しょうがいの十歳から十五歳までの年月を過したのである。子供の豊かな頭脳というものは、それを満たしたり楽しませたりするにはなにも外界の出来事を必要としない。そして見たところ陰気なくらい単調な学校生活は、私が青年時代に奢侈しゃしによつて得たよりも、あるいは壮年時代に罪惡によつて得たよりも、もつと強烈な刺激に満ちていたのであつた。でも、私の最初の心の発達には普通ではないものが——常軌を離れたものさえ

——よほどあったということは、信じないわけにはゆかない。一般の人々にとつては、ずっと幼いころの出来事は、大きくなつてからはつきりした印象を残していることがめつたにないものだ。すべてが灰色の影——かすかな不規則な記憶——あわい快樂と幻のような苦痛とのおぼろげな寄せあつめ——である。私にはそうではない。子供のころ、私は、いまもなおカルタゴの賞牌メダルの銘のようにありありした、深い、長もちする線で記憶に刻み込まれているところのものを、大人のような力をもつて感じたのにちがいないのだ。

と言つても、事實は——世間の目から見れば——そこには思い出すことはなんと少ししかなかつたことだろう！ 朝の目覚めや、夜ごとの就寢命令、復習や、暗誦あんしやう、定期的な半休や、散歩、運動場での喧嘩けんかや、遊戯や、悪企わるたくみ、——こんな事がらが、長いあいだ忘れられていた心の妖術ようじゆつによつて、あまたの感覺、かずかずの豊富な出来事、さまざまな悲喜哀樂の感情、もつとも熱情的な感動的な興奮などを味わわせてくれたのだ。

「*Oh, le bon temps, que ce sie`cle de fer!*」 (おお、この草昧そつまいの時代の、樂しかりしころよ！)

實際、私の熱情的な、熱狂的なまた横柄おうへいな気性は、間もなく自分を学友たちのなかでのきわだった人物にさせ、また少しづつ、しかし自然な順序を踏んで、自分よりはさほど

年が上ではない者全部に権力を揮^{ふる}うようにさせてしまった。——ただし、それにはたった一人だけ例外があった。この例外というのは、なんの縁故もないのではあるが、私自身と同じ洗礼名と姓とを持っている、一人の生徒なのであった。——このことは、事実、大して珍しいことではなかった。なぜなら、貴族の出ではあるが、私の名は、長いあいだ用いられてきた権利によってよほど昔から庶民の共有物となつていられるように思われる、あのごくありふれた名前の一つであつたのだから。この物語では私は自分をウィリアム・ウィルスンと名づけることにしているのであるが、——これは実名とあまり違わぬ仮名なのである。学校の言葉で、「我々の仲間」と言っている者のなかで、この私の同名者だけが、あえて学科の勉強でも——運動場の競技や喧嘩でも私と競争し、——私の断言を盲目的に信ずることや、私の意志に服従することを拒み、——私の専断的な命令になんであろうと事ごとに干渉したのであった。もしこの世に最高無条件の専制政治というものがあるなら、それは一人のぬきんでた子供が、その仲間たちの気の弱い心にたいして揮う専制政治である。

ウィルスンの反抗は、私にはこの上ない当惑の種であつた。——人前では彼や彼の言い草を空威張りであしらうようにとくに気をつかつたものの、内心では彼を恐れていた。ま

た、彼が私にたやすく対等に振舞っているのは、彼のほうがほんとうは上手^{うわて}である証拠だと思わずにはいられなかつただけ、ますます当惑の種であつたのだ。だから負けまいとするためには、私は絶えず努力をしなければならなかつた。だが、この彼のほうが上手であるということは——彼が私と対等であるということさえも——私自身のほかにはほんとうに誰一人として気がつかないのであつた。私たちの仲間、なにか妙な愚かさのために、そのことは疑いさえもしないらしかつた。実際、彼の競争も、彼の抵抗も、ことに私の意図にたいする彼の無遠慮なしつこい干渉も、きびきびしたものというよりも、むしろ内々のものであつた。また、私を駆りたてて卓越させようとする野心も、熱情的な心の力も、彼は持つていないようだつた。彼の敵対は、ただ私自身を邪魔したり、驚かせたり、あるいは口惜^{くや}しからせたりしようとする気まぐれな欲望だけからやつているらしいと考えられた。もつとも、ときには、彼の無礼や、侮辱や、反抗のなかに、あるひどく不似合いな、たしかにひどく癩^{しやく}にさわる親切ぶかい態度をまじえるのを、私は不審と屈辱と、立腹との気持をもつて認めざるをえないことがあつた。この奇妙な挙動は、人を保護したり、かばつたりするような卑^{いや}しい態度をとりたがる、完全な虚栄心から起るのだ、としか私には考えられなかつた。

たぶん、ウィルスンの行為のこの後者の特徴が、二人の名が同じだということと、二人が同じ日にこの学校に入学したという単なる偶然の出来事と一緒にあって、私たち二人が兄弟なのだという考えを、その学校の上級生の間にひろげたのであろう。上級生というものは普通は下級生のことを大して精確に詮議^{せんぎ}はしないものだ。私は前に言ったが、あるいは言うべきであったが、ウィルスンは私の一家とはどんなに遠い親族関係もなかったのである。しかし、もし私たちが兄弟であったとしたなら、たしかに二人は双生児であったにちがいない。なぜなら、フランスビー博士の学校を去ったのち、私は自分の同名者が一八一三年の一月十九日に生れたのであることを偶然に知ったのだ。——そしてこれはちよつと珍しい暗合であった。というのは、その日はまさしく私自身の誕生日なのであるから

(7)。

妙に思われるかもしれないが、ウィルスンが我慢ならない反抗精神で敵対して私を絶え間なしに不安にさせていたにもかかわらず、私はどうしてもまったく彼を憎むという気にはなれないのであった。たしかに二人はほとんど毎日のように喧嘩をしたが、その喧嘩では、彼は表向きは私に勝利をゆずりながらも、なにかの方法で、ほんとうに勝ったのは彼であることを私に感じさせるようにした。けれども、私の高慢と、彼の真実の威厳とは、

いつも二人を「言葉をかわずくらの間柄」^{あいだから}にしていたのであった。一方、二人の氣質には実によく似た点がたくさんあつて、それが、私に、二人がこんな立場でさえなかつたら、おそらくは友情にまでなつていったかもしれないのと思う気持ちを起させた。實際、彼にたいする私のほんとうの感情をはっきり定義することは、あるいはただ記述することですえも、むずかしいのである。それは雑多な異質の混合物だった。——憎悪^{ぞうお}というほどではない短気な怨恨^{えんこん}もあり、尊敬の念もいくらかあるし、尊重の気持はもつと多くあり、恐れ^{おそ}の心はよほどあり、不安な好奇心はうんとたくさんあつた。倫理家には、ウイルスンと私自身とがまったく切つても切れない仲間であつたということは、つけ加えて言う必要もないであろう。

疑いもなく、二人のあいだにあるその変則的な関係が、私のウイルスンにたいするすべての攻撃（それは公然とやるのも、こつそりとやるのもどちらもたくさんあつたが）を、真面目^{まじめ}なきつぱりした敵対でやるよりも、からかいか悪戯^{いたずら}（ただふざけているように見せかけながら苦しめるのである）の方面に向けさせたのにちがいない。しかしこのことについての私の努力は、もつともうまく自分の計画を仕組んだときですえも、決してみな成功するというわけにはゆかなかつた。なぜかというところ、鋭い冗談をやりながらも、ただ一

つの弱みも持たず、また人から笑われることを絶対に許さない、あのたかぶらない静かな厳格さというものを、私の同名者はその性格にたくさん持っていたからである。実際、私はたつた一つしか弱点を見出すことができなかつた。それは、たぶん生れつきの病気からくる身体の特異性にあるもので、私ほど知恵が尽きて他にどうにもしようがなくなつた者でなければ、どんな敵手でも見のがしたものである。——私の競争者は咽喉のどの器官に悪いところがあつて、そのためにどんなときでもごく低いささやき以上に声を高めることができなかつたのだ。この欠点に私はすかさず自分の力の及ぶかぎり、大したこともないのにつけこんだのであつた。

ウィルスンの返報は種類がさまざまであつた。そしてそのなかで私をひどく苦しめた悪戯が一つあつた。そんな下らないことが私を困らせるということ、どんなに利口な彼でもどうして最初にかく見つけたかということは、私になんとしても解けない疑問である。が、それを見つけると、彼はいつもそれで私を悩ませたのだ。私はいつも、自分の貴族的でない姓と、下品というほどではなくともごくありふれた名とを、嫌きらつていた。その言葉を聞くと耳のなかへ毒液を注ぎこまれるようだつた。そして、私がこの学校へ着いた日に、もう一人のウィリアム・ウィルスンもまたその学校へ来たとき、私は、彼がその名

を持つていることに腹立たしく感じ、また、他人がその名を持つていて、その男のためにそれが二倍もくりかえして呼ばれるのを聞かなければならぬだろうし、その男は常に私の前にいるだろうし、その男が学校のいつもの普通の仕事でいろいろやることは、その厭らしい暗合のために、きつとちよいちよい私自身のと混同されるにちがいないのだから、その名を二重に嫌ったのだ。

こうして生れたいらだたしい感情は、競争者と私とが精神的にも肉体的にもよく似ていることを示すような事情が一つ一つ起るたびに、いよいよ強くなってきた。そのときは私はまだ二人が同じ年であるというたいへんな事実を発見していなかった。が、二人が同じ丈であることはわかっていたし、大体の体つきや目鼻だちが奇妙に似てさえいることを認めていた。私はまた、上級生の間に流れていた、あの二人が血族関係だとかいう噂うわさに悩まされた。とにかく、二人のあいだに心でも、体でも、あるいは身分でも類似があるということをちよつとでも言われることほど、私をひどく苦しませることはなかったのだ（もつとも私はそういう苦痛をひた隠しに隠してはいたが）。しかし、（血族関係という事がらと、ウイルスン自身の場合とをのぞけば）この類似が学友たちの話題になったり、あるいは気づかれたりさえしたことが一度でもあった、と信ずべき理由はなになんか一つなかった。

彼がそのことに、そのすべての方面において、また私と同じくらいはつきりと、気づいていた、ということは明らかであった。が、そういう事がらがそんなにひどく私を悩ませるということを知れば、彼が見抜いたのは、前に言ったように、まったく彼のなみなみでない眼力によるというよりほかはない。

私を完全に模倣するための彼の手がかりは、言葉と動作との両方にあつた。そして実際に見事に彼はそれをやったのだつた。私の服装をまねるなどはたやすいことだつた。私の歩きぶりや全体の態度は苦もなくまねてしまった。生れつきの欠陥があるにもかかわらず、私の声さえも彼はのがさなかつた。私の大きな声はむろん出そうとはしなかつたが、調子は——そっくりだつた。そして彼の奇妙なささやきは——私の声の反響そのままになつてきた。

この実に精緻せいしちな肖像画（というのには、それはどうも戯カリカチュア画と名づけるわけにはいかなかつたのだから）がどんなにひどく自分を悩ませたかは、いまここで書きしるそうとはしまい。たつた一つだけ気休めがあつたが、——それは、私一人しかその模倣に気がつかないらしいことだ。だから、私は自分の同名者自身の妙に皮肉な、わざとやってみせる微笑さえ我慢すればいいのであつた。彼は、自分の企てたとおりの効果を私の胸のなか

にひき起したことに満足して、自分の与えた苦痛にこつそりくすくす笑っているようだった。そして、自分の機知の成功で実にたやすくみんなの喝采かつさいを博することができたろうに、そんな喝采のことなどはまるで考えてみもしなかった。どうして学校じゅうの者がてんで彼の計画に気がつかず、それがまんまと成功していることもわからず、彼と一緒になつて嘲笑ちやうしょうもしなかつたかということは、多くの不安な年月のあいだ、私には解きえぬ謎なぞであつた。おそらく、彼が少しずつ少しずつその模倣をやつたために、そんなに造作なくは気づかれなかつたのであろうか。あるいは、それよりも、模倣者の巧妙な態度のおかげで、私は助かつたのかもしれない。彼は、文字（真似られた筆跡などは、どんな愚鈍な者でもみなわかるのである）などは軽蔑けいべつして、私一人にだけよくわからせ口惜しがらせるために、彼の独創的な全精神を傾けたのだった。

彼が私をかばうようなまいましい態度をとつたり、私の意志に幾度もおせっかいな干渉をしたりしたことは、すでにくりかえして言つたとおりである。この干渉はときどき不愉快な忠告の性質を持つことがあつた。公然とする忠告ではなくて、それとなく言うような、あてつけて言うような忠告である。私はそれをされるのが実に嫌いだったが、その嫌悪けんおは年をとるにつれて強くなつてきたのだった。だが、こんなに遠く月日がたつたいま

なつては、彼のために当然この一事ぐらゐは認めてやりたいと思う。それは、自分の競争者の忠告が、彼のような若い、未熟な者にはごくありがちな、誤りや愚かさに陥っていたことなど、一つも思い出すことができないということ。一般的な才能や世間的な知恵はとにかく、少なくとも彼の道義心は自分よりもずっと鋭かったということ。また、自分があの当時はただあまりに心から憎み、あまりにはげしく軽蔑けいべつした、あの意味ふかいさやきのなかの忠告を、あんなに始終拒まなかつたならば、いまの自分は、いまよりはもっと善良な、したがつてもつと幸福な人間になつていたかもしれない、ということである。

しかしその時はそうではなかつた。だから、私はどうとう彼の不愉快な監督にすっかり憤慨してしまい、私には我慢ごうまんならないその傲慢さを、日ごとにもますます公然と憎むようになつた。前にも言つたように、二人が学友関係になつた最初の一、二年は、彼にたいする私の感情は、たやすく友情にまでなつていったかもしれないが、学校生活の終りごろになると、彼の普通の出しやばりはたしかにいくらか減つてはいたけれど、私の気持は、それとほとんど同じくらいの割合で、非常に積極的な憎悪を持つようになつた。あるとき彼はこのことを知つたらしく、それからあとは私を避けた。あるいは避けるようなふうをしてみせた。

もし自分の記憶が誤っていないなら、大体それと同じころのこと、私は彼と猛烈な争論をしたのであったが、そのとき、彼はいつもよりはずつと警戒の念をすてて、彼としては珍しくあけつ放しな挙動でしゃべったり振舞ったりしたが、その彼の口調や、態度や、全体の様子のなかに、私は最初は自分をぎよつとさせ、それから次には自分に深い興味を与えたあるものを、発見した。あるいは発見したような気がした。というのは、自分のごく幼いころのおぼろげな幻影——記憶力そのものがまだ生れないころの奇怪な、混乱した、雑然と群がってくる記憶——が自分の心に思い浮んだからなのだ。私は、自分の前に立っているものとは自分はよほどずつと以前のある時期——無限にとさえ言っていていくらい遙かな過去のあるとき——から知り合っているのだという信念を、なかなか払い落とすことができなかった、というより以上に、そのとき自分を襲った気持をうまく書きしるすことはできない。しかし、この妄想は浮ぶとすぐさつさと消え去った。そして私は、ただ自分がその不思議な同名者とそこで最後の会話をした日のことを言うだけのために、このことを述べるのである。

数えきれないほどの区画のあるその大きい古い家には、互いに通じている大きな部屋がいくつあつて、そこに学生の大部分が寝ていたのだった。しかし、(そのように不器用

に設計された建物にはどうしても当然あることだが、一建物の余ったところや端つこの、小さな隅すみあるいは凹へこんだところが、たくさんあって、それもまた、ブランスビー博士の経済的工夫力によって、やはり寝室になるように造つてあつた。もつとも、それはまったくほんの戸棚とだなのようなもので、たった一人だけしか使うことができなかつた。その小さな部屋の一つにウィルスンはいたのだ。

私がその学校へ入つてから五年目の終りごろのある晩、いま言つたあの争論をやつたすぐあと、みんながすっかり寝しずまつたのを見て、私は寢床から起き上がり、ランプを手にして、自分の寢室から自分の競争者の寢室へと、せまい廊下をいくつもいくつもそつと忍び足で通りぬけて行つた。私は長いあいだあの意地悪な悪戯の一つを彼に加えてやろうとたくらんでいたのだが、これまではそれがいつも失敗してばかりいたのだつた。今度こそ自分の計画を実行してやろうというのが、そのときの私の考えで、私は、自分のいだいでいる怨恨をいやというほど思い知らせてやろうと決心したのだ。彼の部屋へ着くと、ランプに笠かさをかけて室の外へ残しておいて、音をたてずに内へ入つた。私は一足踏みこんで、彼の静かな寢息に耳をすました。彼の眠つていることを確かめると、戻つて、ランプを手に取り、それを持ってまた寢床に近づいた。寢床のまわりはカーテンでびったり閉じこめ

てあつたが、自分の計画にしたがつて、そのカーテンをゆっくりと静かにひきのけたとき、明るい光線が眠っている者の上へきつぱりと落ち、私の眼は同時に彼の顔の上へ落ちた。私は眺めた。^{なが}——と、たちまち、しびれるような、氷のように冷たい感じが体じゆうにしみわたつた。胸はむかつき、膝はよろめき、全心は対象のない、しかし堪えがたい恐怖に襲われた。息をしようとして喘ぎながら、私はランプを下げてもっとその顔の近くへよせてみた。これが——これがウイリアム・ウイルスンの顔なのであるうか？ 私はそれが彼ののだということをちゃんと知っていた。が、そうではないような気がして、瘡の発作おこりにでもかかったかのようにぶるぶる震えた。その顔のなにか自分をそんなくあいにとぎまぎさせたのであろうか？ 私はじつと見つめた。——すると、さまざまな筋道の立たぬ考えが湧き上がつて頭がぐらぐらとした。彼が目が覚めていて活潑かつぱつでいるときは、彼はこんなふうには見えなかった、——たしかにこんなふうには見えなかった。同じ名前！ 同じ体つき！ この学校への同じ日の到着！ それからまた、私の歩きぶりや、声や、服装や、態度などにたいする彼の執念ぶかい無意味な模倣！ 自分のいま目にしてるところのものが、そういう皮肉な模倣を不断にやりつけていることの単に結果なのだということが、まことに、人間の力でできることであらうか？ 畏怖いふぶの念に打たれ、ぞつと身ぶるいしな

がら、私はランプを吹き消し、こつそりその部屋を出て、すぐにその古い学校の校舎を立ち去り、二度と決してそこへ戻らなかつた。

それから幾月か家でただのらくらして過したのち、私はイートンの学生になった。そのあいだの短い月日は、ブランスビー博士の学校でのあの出来事の記憶を弱めるのに、あるいは、少なくともその記憶にたいする感じ方を著しく変えるのに、十分であつた。その劇の真实性——悲劇性——はもうなくなつていた。いまではあのとときの自分の感覚が確かだつたかどうかと疑う余裕さえできた。そしてたまにあの事がらを思い出すときには、ただ人間というものはなんと物事を軽々しく信ずるものかと驚き、自分が遺伝的に持つている澁刺^{はつらつ}たる想像の力に微笑^{ほほえ}んだのだつた。またこの種の懷疑は、自分がイートンで送つた生活の性質のために減り^{うす}そうにもなかつた。私がそこですぐさま向う見ずに跳びこんでいた無分別な愚行の渦^{うず}は、自分の過去の月日の泡^{あわ}だけを除いてすべてを洗い去り、堅実な、または真面目な印象は一つ残らずさつきとのみこみ、以前の生^{しょう}涯^{がい}の全く浮薄なものだけしか記憶に残さなかつたのだ。

しかし、私は、このイートンでの自分のあさましい乱行——学校の目を巧みにのがれながら、学校の規則などものともしなかつた乱行——をいちいちたどって書こうとは思わぬ。

愚行の三カ年は、ただ私に悪徳の根ぶかい習慣をつけ、またちよつと普通以上に私の背丈を伸ばしただけで、なんの得るところもなく過ぎ去つた。が、そのころ、一週間もめっちゃくちな放蕩ほうとうをしたのち、私はもつとも放縦な学生の数人を自分の部屋での秘密な酒宴に招待したのであつた。私たちは夜がよほど更ふけてから集まつた。自分たちの乱行をまぢがいなく朝までもつづけるつもりだつたのだから。酒は豊かに満ちあふれていたし、それ以外のおそらくもつと危険な誘惑物なども欠けてはいなかつた。というわけだつたから、私たちの有頂天の乱痴氣騒さわぎがその絶頂に達しているうちに、東の方ははやかすかにほんのりと白みかかつていたのだつた。骨牌かるたと酪めいてい酏しとのために狂つたように興奮して、私にまさにもつと以上の不埒ふらちな言葉を吐いて乾杯を強しいようとしていたちようどこのとき、とつぜん自分の注意は、部屋の扉が少しではあるがはげしく開かれて、外から一人の小使がせかせかした声で呼んでいるのに、逸そらされた。彼は、誰か急用のあるらしい人が、玄関のところ私に会つて話したいと言つてゐる、と告げた。

ひどく酒に酔つぱらつていたので、この思いがけない邪魔が入つたことは、私を驚かせるよりもむしろ喜ばせた。すぐさま私は前へよろめいてゆき、五、六歩歩くとその建物の玄関へ出た（8）。その低い小さな室へやにはランプは一つもかかつていないので、そのとき

は、一つの半円形の窓から射しこんでくるごくかすかな暁の光のほかには、光はぜんぜん入っていなかった。その室の闕しきいをまたいだとき、私は自分と同じくらしい背の高さで、自分がそのとき着ていたもののように最新流行型に仕立てた白いカシミヤのモーニング・フロックを着た、一人の青年の姿に気がついた。それだけのことは、そのかすかな光で認められた。が、彼の顔の目鼻だけは見分けることができなかった。私が入ってゆくと、その男は急いで私の方へずかずかと歩みよって、怒りっぽいじれったそうな身ぶりで私の腕をつかみながら、私の耳もとで「ウィリアム・ウィルスン！」とささやいた。

私はたちまち、すっかり酔いがさめてしまった。

その見知らぬ男の態度には、また光と私の眼とのあいだに揚げた彼の指のぶるぶる震えていたことには、私にまったくの驚愕きょうがくの念を感じさせるものがあつた。が、私をそれほどはげしく感動させたのは、そのことではなかった。それは、奇妙な、低い、叱しかるような声の厳かな警告の意味ふかさであつた。また、とりわけ、過ぎし日の多くの群がりよる記憶を呼び起し、私の魂に電流に触れたような衝撃を与えた、あの短い、単純な、よく聞きなれた、しかもささやくような声の性質、音色、調子であつたのだ。私がつと感覚の働きを回復したときには、その男はもう見えなかった。

この出来事は私の錯乱した想像力に強烈な効果をたしかに与えずにはいなかったが、それでもその効果は強烈であると同様に一時的なものだった。実際、何週間かは、私は熱心な詮議せんぎに没頭したり、病的な考究の雲に包まれたりした。私は、そのように根気よく自分のなすことに干渉し、あてつけに忠告をして自分を悩ませるその不思議な人物が誰であるかということをも、知らないふりをしようなどとはしなかった。しかし、このウイルスンとは何者であるか？——そして彼はどこから来たのか？——また彼はなにをするつもりなのか？——こういう事がらになると自分にはそのなかの一つも満足にわからなかった。——ただ、彼について確かめることのできたのは、彼の家族に突然なにかの出来事があって、そのために彼はブランスビー博士の学校を、私自身が逃げ出したあの日の午後に退いた、ということだけであった。しかし、やがて私はその事がらについて考えることはやめてしまった。オックスフォードへ向つて出発しようと思つていたので、それに自分の注意はすつかり取られたのだ。間もなくそこへ行つたが、私の両親の無考えな虚栄は、私に、すでに自分の心にはごく親しいものであつた奢侈しやしに思いのままにふけることが——大ブリテンでももつとも金持の貴族の傲慢な子弟たちと金遣いの荒さでは張りあうことが——できるようにさせたほどの小遣いと年々の費用とを、あてがつてくれた。

そういうような悪徳に都合のいい手段に励まされて、生来の気質はすぐに二倍もはげしくなり、私は常軌を逸した飲み騒ぎに惑溺し、普通の世間体の拘束さえも蹴とばしてしまつたのだつた。しかし自分の乱行をここで詳しく書きたてるのはばかげたことであろう。ただ、自分が金遣いの荒い道楽者連中のあいだでも群を抜いていたということと、あまたの新しい愚行を考え出して、ヨーロッパじゅうでもいちばん放縦な大学でその当時常に行われていた悪徳の長い目録に、かなりの増補を加えたということとを、言っておくだけにしよう。

だが、ここでさえも、私が紳士としての身分からまったく墮落して、職業的の賭博者の陋劣ろうれつきわまる手管てくだを覚えこもうとし、また、その卑劣な術策の達人になつてからは、いつもそれを実行して、仲間の学生たちのなかの愚鈍な連中から金をまき上げて、そうでもなくとも莫大ばくだいな収入をいやが上にも増す手段としていた、ということとはとても信じられないであろう。けれども、事實はそうだつたのだ。そして、あらゆる立派な正しい情操に反するこの罪科のあまりに大きいというそのことが、疑いもなく、それが行われながら罰せられなかつたことの唯一ゆいいつのものではなくとも主要な理由となつたのだつた。実際、私の放縦な仲間たちのなかで、あの快活な、率直な、寛大なウィリアム・ウィルスン——オツク

スフォードでもいちばん高潔でいちばん気前のいいあの自費生——彼の乱行は青年の放肆ほうしな空想のさせる乱行にすぎず——彼の過失はまねのできぬ気まぐれにすぎず——彼のいちばん暗い悪徳も無頓着むとんじやくな血気にまかせてする放蕩ほうたうにすぎない（と彼の取巻き連の言う）あのウイリアム・ウイルスン——がそういうようなことをしようと疑うよりは、むしろ自分の気が確かかどうかを問題にしようとしめない者がいたろうか？

もうはや二年もそんなふうにして私はいつも首尾よくやってきたが、そのころ、その大
学へ、グレンディニングという若い成金なりきんの貴族——人の噂うわさによるとヘロオデス・アツテ
イクス（9）のような金持で——また彼の富はそのようにたやすく手に入れたものだそう
であつた——が、入つてきた。私にはすぐこの男の低能なことがわかつたので、もちろん、
自分の手練を揮ふるうに持つて来いの相手として目をつけた。私はたびたび彼と賭博をやり、
賭博者のいつもやる策略で、自分の罫わなにいつそううまく陥らせるために、彼にかなりの額
を勝たせるように仕向けた。とうとう、もう自分の計略が熟してきたので私は彼と仲間の
自費生（プレストン君）の部屋で（これを最後の終決的な会合にしてやろうと堅く思いな
がら）会つた。プレストン君というのは二人とも同じく懇意なのであるが、彼のために言
つておけば、彼は私の企圖たくらみはほんのちよつとばかりも疑つていはしなかつたのである。

この会合にさらにもつともらしい文あやをつけるために、私は八人か十人ばかりの連中が集まるように仕組み、それから骨牌かるたがいかにも偶然に持ち出されたように見え、しかも私の目をつけているその阿呆あほう自身が言い出して始まるように、よほど気をつけてやったのだった。この陋劣な題目について簡単に言ってしまうえば、どうしてまだ一人でもそれにひっかかるほどの愚かな者がいるのかということがまったく不思議なくらいそういうような場合にはいつも決して用いられる、あの卑劣な術策は一つ残らず使ったのだった。

私たちは勝負をずっと夜までつづけ、私はとうとうグレンディニングを自分のただ一人の相手にする運びをつけてしまった。競技は、そのうえ、私の得意のエカルテ（二〇）だった。一座の他の連中は、私たちの勝負の大きいのに興味を持ち、自分たちの札を投げ出してしまつて、二人のまわりに立って見物した。宵よいのうちに私の謀略でしたたか酒を飲まされていたその成金は、いまやひどく神経質な態度で札を切ったり、配ったり、打ったりしたが、その態度はいくらかは酔いのためであろうがそればかりではないにちがいないと私には思われた。またたく間に彼は私からずいぶんの額を借りることになったが、そのとき、彼はポルト酒をぐうつと一気に飲みほすと、まさに私が冷静に予期していたとおりのことをした。——そうでなくとも法外な額の賭かけ金を、二倍にしようと申込んだのだ。いかに

も厭いやなような様子をしてみせ、また幾度も拒絶して彼を怒らせて、おとなしくしている自分をもちよつとむつとさせるような言葉を彼に吐かせてから、とうとう私は応諾してやった。その結果は、無論、その餌食えじきがいかにもまったく私の罠にかかっているかということを示すだけだった。一時間もたたないうちに彼は借金を四倍にしてしまった。少し前から彼の顔は酒のために染まった赤らんだ色合いを失いつつあったが、いまや、驚いたことには、それがまったく恐ろしいくらいあおの蒼さになっているのを私は認めた。驚いたことには、と私は言う。グレンディニングは、私が熱心に探ったところでは、測り知れないくらいあの金持だったのだ。そしてそれまでに彼の損をした額は、それだけとしては莫大なものではあるけれど、さほど大して彼を困らせるはずはない、ましてそんなにはげしく彼に打撃を与えるはずがないと私は考えた。たつたいま飲みこんだ酒に酔いつぶれたのだというのが、すぐさま胸に浮んだ考えであった。そこで、私は、それほど利己的ではない他のいかなる動機でよりも、むしろただ仲間たちの目に自分自身の品性を保とうというだけの目的で、勝負を中絶することをきつぱり主張しようとしたそのとき、一座のなかの私の近くにいた者の口にした二、三言と、グレンディニングの思わず発したまったくの絶望を表わす声とは、彼が、みんなの憐憫れんぴんの的となつて悪魔の仇あだからでも保護されるくらいな事情のもと

に、私のために完全な破滅をさせられたのだ、ということ私に理解させたのであった。

このとき私がどう振舞つたろうかということ、言うのがむずかしい。私にひっかかれた男のその惨めな有様は、あらゆるものにせつばつまったような陰惨な様子を投げかけていた。そしてしばらく深い沈黙がつづいたが、そのあいだ、私は、一座のなかの比較的真面目な連中が自分に投げる、軽蔑や非難の焼くような多くの視線で、自分の頬がちくちくするのを感じずにはいらなかった。そのとき不意の驚くべき出来事が突発したために、自分の胸からちよつとのあいだ堪えがたい苦痛の重みを取りのけられたくらいだ、ということ私には白状してもいい。その室の広い、重い両開き扉がとつぜんぱつといっぱいに開かれ、その力強い凄まじい猛烈さのために、部屋じゅうの蠟燭が一つ残らず、まるで魔術で消えたかのように消されたのだ。その蠟燭の明りが消えてゆくときに、私たちは、私くらいの背の、外套にぴつたりとくるまった一人の見知らぬ男が入っているのを、ちよつと認めることができた。けれども、すぐにまったくの真つ暗闇となり、私たちはただその男がみんなの真ん中に立っているのを感じることができただけだった。この無作法に一同がすっかり驚き、まだ一人もその驚きが鎮まらないうちに、その闖入者の声が聞えたのであった。

「諸君」と彼は、私の骨の髄までもぞっとするような、低い、はつきりした、決して忘れられないささやき声で言った。「諸君、私はこの振舞いにたいしてなにも弁解はしません。こう振舞って、ただ私は一つの義務を果しているのだからです。諸君はたしかに、今夜グレンディング卿きょうからエカルテで大金をまき上げた人間の本性をご存じない。だから、私は、そのきわめて必要な知識を得る手っ取り早い確かな方法の一つ、諸君にお授けしましょう。どうか、その男の左の袖そでのカフスの内側と、縫取りしたモーニング・ラッパの広いほうのポケットのなかにあるはずのいくつかの小さな包みとを、ごゆっくりお調べください」

彼がしゃべっているあいだは、床の上へ針が一本落ちてても聞えそうなほど、ひっそりと鎮まりかえっていた。言いおわると、彼はすぐに、また入って来たときのように突如として、行ってしまった。そのときの自分の感じを私は書くことができるだろうか——書かねばならぬだろうか？ 私は地獄に落ちた者のあらゆる恐怖を感じたなどと言わねばならぬだろうか？ たしかに私には考えている暇はほとんどなかった。たくさんの手がすぐに私を乱暴にひつつかみ、明りはまたすぐに持つて来られた。つづいて捜索が行われた。私の袖の裏から、エカルテにもつとも肝心なあらゆる絵札が発見され、ラッパのポケット

からは、たくさんの骨牌札が発見された。これは私たちの勝負に使った札とそっくりのもので、ただ一つ違っているのは、私のはその道の言葉で言えばアロンデ（E）という種類のものであった。すなわち、最高札は上下の縁が少しばかり凸オナアズ形とつがたになっているし、並の札は両横の縁が少しばかり凸形になっているのである。こんなぐあいになっているので、だまされる人は普通のように札を縦に切るものだから、いつも相手に最高札のほうを切つてやるし、だますほうは横に切るから、同様にきつと相手に点になるような札は一枚もつかませないことになるのだ。

このことが露顕したとき、みんなが一時に憤りたててもくれたなら、それほど私も参らなかつたらうが、みんなはただ黙つて軽蔑の色を浮べ、または皮肉な様子で平然としていたのだつた。「ウィルスン君」と部屋ぜいたくの主人は、体をかがめて、珍しい毛皮のすばらしく贅ぜいたく沢な外套を足の下から取り上げながら、言った。「ウィルスン君、これは君の物だよ」（寒い時候だったので、私は自分の室を出るときに、ドレッシング・ラツパーの上へ外套をひっかけてきて、その骨牌をやる部屋へ入ると脱いでおいたのだつた）「この上のお手並の証拠を拝見するために、ここを」（と外套の裏ひだのところを苦々しい微笑を浮べて眺めながら）「捜すのは余計なことだろうと思う。実際、あれだけでもう十分だ。君はオ

ツクスフオードを立ち去らねばならないことはわかっているだろうな。——ともかく、僕の部屋からはすぐさまね」

私はそのときすっかり面目を失い、ひどく屈辱を感じてはいたが、もし一つのもつとも驚くべき事実とその瞬間自分の全注意をひかれなかったならば、このいまましい言葉にたいしてすぐさま直接行動に出たかもしれない。私の着ていた外套は世にも珍しい種類の毛皮でこさえたものだった。どんなに珍しいもので、どんなに途方もないほど高価なものであったかということは、あえて言うまい。その型もまた、私自身の風変りな考案になるものだった。そんなつまらぬ事がらにまで、私はばかげたくらいに気むずかしくめかしやだったからである。そういうわけだったから、プレストン君が部屋の両開き扉の近くの床の上から拾い上げたものを私に渡してくれたとき、私は、私自身のがはや自分の腕にかかっている（たしかに自分でうっかり腕へかけておいたのだ）、自分にさしつけられたのは、どこからどこまで、実にもつとも細かな点に至るまでも、それにそっくり似せた物にほかならぬということに気がついて、ほとんど恐怖に近いくらいの驚きを感じたのであった。あんなに私の秘密をすっぱ抜いてひどい目にあわせたあの不思議な人物は、私の記憶しているところでは外套にくるまっていた。そして私たちの一座の者は、私をのぞいては、誰

ひとり外套を着ていなかったのだ。多少の落着きは保っていたので、私はプレストンが差出してくれたのを取り、誰の目にもつかずにそれを自分の外套の上に向け、にらみ返すような強い顰め面しかつらをしながらその部屋を出た。そして、翌朝まだ夜の明けないうちに、まったく苦しいばかりの恐怖と屈辱とを感じながら、オックスフォードから大陸へあたふたと旅立ったのである。

私はむなしく逃げまわった。私の邪悪な運命はまるで喜び勇んでのように私を追いかけて来て、その運命の不思議な支配がまだ始まったばかりだということを示した。私はパリへ足を踏み入れるや否やいな、このウィルスンが私のことに憎むべき関心を持っていることの新たな証拠を見た。幾年も過ぎ去ったが、そのあいだ私は少しも心の安まることはなかった。悪党！——ローマでは、どんなに折悪わりあしく、しかもどんなに妖怪ようかいのようなおせっかいをもつて、私の野心の邪魔をしたことか！ ウィーンでも——ベルリンでも——またモスコーでも！ まことに、心のなかで彼を呪のろうべき苦い理由を持たなかった所がいずこにあつたか？ 不可解な彼の暴虐ぼうぎやくから、私はとうとう戦々兢兢きょうきょう々として疫病えきびょうから逃げるように逃げた。そして地球のはてまでも私はむなしく逃げまわった。

再三再四、私はそつとわが心に問うた、「彼は何者であるか？ ——彼はどこから来た

のか？——また彼の目的はなんであるか？」と。しかし答えは一つも得られなかった。それから今度は、彼のあつかましい監督の形式と、方法と、主要な特徴とを、細かな詮索をして吟味してみた。けれどもそこにすら推量の基礎となるべきものはほとんどなかった。実際、気のつくことは、彼が最近私の邪魔をした多くの場合のすべてが、もしそれがほんとに実行されたなら**忌むべき害**を生じたであろう計画や行為に限られていたのだ。だが、これは、あんなに**横柄**に揮った権力にたいするなんと**貧弱**ないわけであろう！自由行動という生得の権利をあんなに**執拗**に、あんなに無礼に否定されたことにたいするなんと**貧弱**な損害賠償であろう！

私はまた、自分の迫害者が、非常に長いあいだ（そのあいだずっと、私と同じ服装をするという彼の酔狂を、注意ぶかく、しかも驚嘆すべき巧妙さをもって、つづけていながら）、私の意志にいろいろな干渉をする際に、彼の目鼻だちをどんなときでも私に見せないようにしていた、ということにも気がつかずにはいられなかった。ウィルスンがたとい何者であろうとも、少なくともこのことは、**実に銜**いの、あるいは愚の最たるものにすぎなかった。イートンでの私の訓戒者——オックスフォードでの私の名誉の破壊者——ローマでの私の野心や、パリでの私の復讐や、ナポリでの私の熱烈な恋や、さてはエジプト

での私の貪欲どんよくと彼が誤つて名づけたものなどを、妨害した男——この私の悪魔であり悪の本尊である男が、私の学童時代のあのウィリアム・ウィルスン——フランスビー博士の学校でのあの同名者、学友、競争者——あの憎み恐れた競争者であることを、私が認められない、などと彼は一瞬間でも想像することができたろうか？ そんなことはありえない！——だが、私はこの劇の最後の重要な場面へ急ぐことにしよう。

これまで私は、この横柄な支配に意気いくじ地なく屈してきた。ウィルソンの気高い性格と、尊厳な叡知えいちと、一見遍在していて全知全能であるように思われることにたいして、自分の常にいただいていた深い畏怖いふの情は、彼の性質のなかのある他の特性と傲慢ごうまんさが自分に起させた恐怖とまで言うべき感じとあいまって、これまでは、私に、自分がまったく無力でどうにもできない者だという考えを与え、また彼の専断的な意志にひどく厭々ながら盲従するようにさせてきたのであった。しかし、近ごろになって、私はまるで酒びたりになり、それが自分の遺伝的な気質に狂おしいくらいの影響を与えて、いよいよ自分を抑えきれなくなつた。私は不平を鳴らし——ためらい——抵抗しはじめようになつた。そして、自分自身の強さが増してくるにつれて自分の迫害者の強さがそれに比例して減っていくように私が信じたのは、ただ気のせいであろうか？ それがいずれにしろ、私はいまや

燃えるような希望の靈感を感じはじめ、とうとう、こつそりと、このうえ決して服従して
 奴隷扱いどれいにされまいという断固とした決心を固めたのであった。

ローマで、一八——年の謝肉祭カーニバルのあいだ、私はナポリの公こうしやく爵しやくデイ・ブロリオの邸宅における仮面舞踏会に出席した。私はその日いつもよりももっとひどく酒を過していた。そしていま、こみ合つた室内の息づまるような空気は、私を我慢のできないほどいらいらさせた。それに、ごつた返している人込みのあいだを押し分けてゆく厄やっかい介かいさも、気持をいらだたせるのにかなり油を注いだ。というのは、私は、かの年をとつて耄もろろく碌ろくしているデイ・ブロリオの、若い、浮気な、美しい細君をしきりに捜して（どんな卑いやしい動機でということは言わないことにするが）いたのだから。彼女は、ひどく不真面目な大胆さで、自分の着ける仮装衣装の秘密を前もって私に知らせてくれていたのだ。そしていまこそ、彼女の姿をちらりと認めたので、私は彼女のところへ行こうとして急いですすんだ。——と、その刹那せつな、自分の肩に軽く手が触れるのが感ぜられ、あのいつも忘れたことのない、低い、いまましいささやきが耳のなかに聞えたのだった。

まったく怒り狂つて、私はすぐに自分をそうして邪魔した男の方へ振り向き、荒々しく
 そいつの襟えりくび首くびをひつつかんだ。彼は、私の予期したとおり、私のとまったく同じ衣装を

身につけていた。剣をつるす深紅色の帯を腰のまわりに巻いた、青天鷲絨びろうどのスペイン風の外套まを纏まとっているのだ。黒い絹の仮面が彼の顔をすっかり蔽おほいかくしていた。

「ごろつきめ！」と激怒のためにしやがれた声で私は言った。私の口から出る一語一語は、自分の怒りをさらに焚たきつける新たな薪まきのようであった。「ごろつきめ！ かたりめ！

いまましい悪党め！——己おれはきさまに——きさまに死ぬまでもつきまとわれてはいないぞ！ ついて来い！ でなけりやこの場で突き刺してやるぞ！」——そして私は、抵抗のできないように彼と一緒にひきずりながら、舞踏室から隣の小さな控ひかえの間へと跳び込んだ。

そこへ入ると、はげしく彼を突きはなした。彼が壁につき当ってよろめいているあいだに、私は呪咀じゆその言葉とともに扉とびらをしめて、彼に剣を抜けと命じた。彼はほんのちよつとのあいだ躊躇ちゆうちよしたが、やがて、かすかな溜息ためいきをつきながら、黙って剣を抜き、防御の身がまえをした。

仕合はごく短かった。私はあらゆる種類のはげしい興奮のために狂気のようになっていて、片腕に百千人の力がこもっているのを感じた。数秒のうちに怪力を揮って彼を羽目板のところへ押しつけ、こうして彼を自分の掌中に握ると、残忍凶猛に、幾度も幾度も彼の

胸へ自分の剣を突き立てた。

その瞬間、誰かが扉の挿錠さしじょうをがちやがちやさせた。私は急いで誰でも外から入って来られないようにして、それからまたすぐその瀕死ひんしの敵手のところへとひき返した。しかし、そのとき眼前にあらわれた光景を見たとき自分をおそったあの驚愕きょうがく、あの恐怖を、どんな人間の言葉が十分にあらわすことができようか？ 私が眼めを離していたそのちよつとのまに、室へやの上手かみての、つまり遠いほうの端の配置に、見たところ、重大な変化が起きていたのだ。大きな鏡が——自分の心が混乱していたので私には最初はそう思われたのだが——いまや前になにもなかったところに立っていたのだ。そして、私が極度の恐怖を感じながらそれに近づいてゆくと、私自身の姿が、だが真まつ蒼さおな、血にまみれた顔をして、力のないよろよろした足どりで私の方へすすんで来た。

そんなふうに見えた。が、そうではなかった。それは私の敵手であった、——それは断末魔くもんの苦悶くもんをしながらそのとき私の前に立ったウィルスンであった。彼の仮面と外套とは床の上に、彼の投げ棄すてたところに、落ちていた。彼の衣服中の糸一本も——彼の顔のあらゆる特徴のある奇妙な容貌ようぼうのなかの線一つも、まったくそのままそっくり、私自身のものでないものはなかった！

それはウィルスンであった。けれども彼はもうささやきでしゃべりはしなかった。そして私は、彼が次のように言っているあいだ、自分がしゃべっているのだと思うことができたくらいであった。――

「お前は勝つたのだ。己は降参する。だが、これからさきは、お前も死んだのだ。――この世にたいして、天国にたいして、また希望にたいして死んだんだぞ！ 己のなかにお前は生きていたのだ。――そして、己の死で、お前がどんなにまったく自分を殺してしまつたかということをお前自身のものであるこの姿でよく見ろ」

- (1) William Chamberlayne (二六一九―七九) ——イギリスの詩人、劇作家。
- (2) Elah-Gabalus (二〇五―二三二) ——本名 Varius Avitus Bassianus. ローマの皇帝。その放埒ほうちやうな乱行をもつて知られている。
- (3) the dim valley ——旧約聖書詩篇第二十三篇第四節に出ている「死のかげの谷」の山谷。
- (4) leading-strings ——歩き初めの子供につかまらせて歩き慣らせる紐ひも。

- (5) *ferule*——学校で、懲罰として児童を、とくにその掌てのひらを、打つためにつくられた木の籠へら。
- (6) 「強い厳しい刑罰」という意味のフランス語であるが、昔、普通の審問に答弁しない罪人に科したものであって、罪人を俯伏うつぶせに臥ふさせてその上に重いものを載せ、白状しなければ死ぬまでそうしておいたという残酷な刑罰である。
- (7) ポーの生年月日は今日では一八〇九年一月十九日であることが確かめられているが、作者自身は自己の誕生日を一八一一年とした手記をグリズウォルドに与え、のちにさらに一八一三年としたのである。なお、この物語の初めの追憶的部分が作者の幼時に学んだイギリスのストーク・ニューイントンのブランズビー博士の学校のことなどを描いたものであることは有名であるが、全編を「半自伝的」の作と考えるのは当を得たものではない。
- (8) これはもちろん、ブランズビー博士の学校寝室などと違って、学生の寄宿舎は学校の本館とは別の棟になっていて、一つ一つの室へやに小さな玄関の間がついているからである。

(9) *Herodes Atticus* (一〇四ハンス—一八〇ハンス) ——本名 *Tiberius Claudius*. キリシ

ヤのアテネの市民であつた富豪。修辞学者であつたが、その著作は今日残っていない。彼の祖父の領地は反逆のために没収されたが、その後彼の父の家で莫^ば大な額の金が発見され、それを所有することを時の皇帝に許されてたちまちにして大財産家となり、彼の結婚によつてもますますその富が増したという。彼はその私財をもつて方々に劇場や音楽堂を建てたり、競技場や競走路をつくつたり水道や温浴場をこさえたり、ギリシヤ各地の滅びた都市を復旧再興させたり、実にさまざまの驚くべき大規模な公益事業をしているが、もつてその富のいかに巨大であつたかが察せられる。

(10) [e'carte'] ——三十二枚の札で二人だけでやる骨牌^{かるたあそび}戯。

(11) [arrondées] ——正しくはフランス語で arrondies と書き、(もつとも英語化されて arondie, arondy などとも書かれるようである)、「円くされた」、「円い」という意味(邦語では「マル札」とでも訳すべきか)。すぐあとに本文で説明されているように、札の縁が少し円味を帯びているからである。

青空文庫情報

底本：「黒猫・黄金虫」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年8月15日発行

1995（平成7）年10月15日89刷改版

2004（平成16）年2月5日100刷

入力：kompass

校正：土屋隆

2005年11月1日作成

2014年3月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ウィリアム・ウィルソン

WILLIAM WILSON

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>